

平成 30 年 3 月 3 日  
横浜歴史研究会  
清水 漠

## 甲斐・武田氏親族 《穴山氏の興亡》

### はじめに－甲斐源氏について

1. **素地**：長元 2 年 (1029) 源頼信が甲斐守に任じられたのに始まる。頼信の祖父は源経基(経基王)。経基は清和源氏の祖と言われ、清和天皇の孫である。当時関東では、上総国の豪族平忠常が、反乱を起こし手が付けられないほどの勢力を誇っていた。追討使源頼信は、甲斐に下向し大乱を制した。甲斐在国は半年足らずであるが、武人としての声望を高め、甲斐国の存在を世に広めた。
2. **始祖**：甲斐源氏の始祖は、その頼信の孫新羅三郎義光(初代)で、陸奥での「後三の役」で手柄を立て、甲斐守として甲斐(北杜市若神子)に着任したのが始まりと言われていたが、実際に入国したのは、義光の子義清(2代)・清光(3代)親子である。(志田諄一氏説)。1100年代常陸に進出した義光が嫡子義業に佐竹郷、次男義清に武田郷(ひたちなか市)を与えて勢力拡大を図ろうとし、在地勢力大穰(だいじょう)氏と衝突したことにより訴えられたものであった。

注：大治 5 年 (1130) 常陸国司が、住人義清・清光の濫行を訴える。《長秋記》その結果二人は甲斐国市河荘(甲斐荘園として始めての荘園、十世紀初頭成立)に流罪になった。(義清土着説 武田氏常陸発祥説)

注：義清は、常陸国武田郷に因み「武田冠者」と注記されている。《尊卑分脈》清光は、進出した地名(八ヶ岳南麓の山の名?)に因み「逸見冠者」(へみ 今の山梨県北杜市)と呼ばれた。
3. **発展(一)**：義清・清光親子及び清光の子らは、その後約 50 年の間に、今の甲府盆地一帯に勢力を広げ、居住地名を氏姓として甲斐源氏発展の基礎を築いた。概ね三勢力に分けられる。(山梨県の歴史より)
  - ① 逸見グループ・逸見郷(北杜市谷戸 or 若神子)を拠点とした、清光の後継者で、甲斐源氏の棟梁武田信義(4代・武田太郎)である。甲府盆地の北部も支配。嫡子忠頼(一条氏)、兼信(板垣氏)、有義(逸見氏)等が属する。
  - ② 東郡(ひがしごうり)グループ・甲府盆地の東部(牧荘・八幡荘安田郷を勢力下に収めた清光の四男安田義定。
  - ③ 西郡(にしごうり)グループ・甲府盆地の西部及び南部に勢力を張った加賀美遠光、及びその子秋山光朝、南部光行ら。
4. **発展**：鎌倉時代から戦国時代にかけて、武田氏一族間の争い、又、時の権力者(鎌倉幕府・南朝・北朝・室町幕府)に対し、支援又は庇護を受け、時には反抗してき

た。15世紀末頃、武田信虎による甲斐統一を経て、その子武田信玄により領国を拡大、戦国有数の大名となった。通説では、甲斐国は、鎌倉時代から戦国時代まで、武田家が守護を務めた稀有の国の一つと言われているが、全て甲斐源氏一色ではなかった。

異説に、鎌倉末期二階堂氏が、逸見・牧荘を領し甲斐守護だったとする説もある。(網野善彦説)

5. 発展(三)：他国における甲斐源氏の足跡として、安芸国・武田氏、信濃国・小笠原氏、若狭国・武田氏等、全国各地で、甲斐源氏＝武田氏一族が、所領支配を梃子に、土着し守護・地頭・代官などで活躍・発展した。

#### 《まとめ》

- ◎初代新羅三郎義光は、甲斐守に任官・在国の形跡はない。二代義清・清光親子が、1130年頃(?) 甲斐国に土着した(義清土着説)。従って武田氏の出自は常陸国である。
- ◎三代清光以降、男子に数多く恵まれ、甲斐国内各地に住み、夫々の地名を名字として勢力を拡大していった。
- ◎鎌倉時代から戦国時代にかけて、甲斐国の守護は、武田氏が通説である。又武田氏一族は、全国各地で、守護・守護代・地頭等で活躍発展した。
- ◎武田一族の代表的人物は、武田信玄であり、甲斐国 20 万石から、信濃・駿河・遠江等々領有し、最終 120 万石の戦国大大名となった。(石高の表示は推定値)

## 【穴山氏の成立】

### 1. 穴山義武・初代(生没年不詳 1350～1360頃活躍)：

穴山氏の初代は、穴山義武と言われる。義武は、甲斐守護武田信武(10代)の子である。然し義武が穴山氏を興したという証拠はなく、系図上で確認するのみ。穴山氏は、義武以前に存在していた地元の有力者＝豪族であった。(平山優説)

甲斐守護武田信武は、何故穴山一族に息子義武を養子に入れたか。甲斐源氏の宗家は逸見氏一族で甲斐国北西部(山梨県北杜市)一帯を支配していたが、後に武田氏に実権を奪われ対立関係にあった。信武は、逸見氏の南(東)下=盆地への進出を阻止すべく、逸見氏支配地域に近い、“穴山=七里岩の台地上の要害(山梨県韮崎市)”を支配する穴山氏に養子を出した(韮崎市誌)。父信武とともに足利尊氏を支え、南北朝内乱時は北朝方に属した。

### 2. 穴山満春・二代(生没年不詳 1390～1430頃活躍)：

義武には実子がなく甲斐守護武田信満(13代)の弟満春(のち信元)を養子に迎えて穴山家の存続を図った。南朝・北朝が統一された翌年明德4年(1392)に、河内領一帯・南部郷を支配していた南朝方の南部氏宗家が陸奥国に転住し、その跡に穴山氏に与えられたと言われる(磯貝正義『武田信重』 韮崎市誌)。

穴山氏の「河内領」進出は、満春の時代と思われる。然しながら残存した南部氏一族と、「河内領」支配をめぐる争いが続いた。

一度高野山で出家したが、還俗し武田信元と称し、甲斐守護になった。

「河内領」：戦国期は河内谷とよばれ、現在の山梨県南巨摩郡と西八代郡の一部。

3. 伊豆千代丸・三代(生没年不詳)：

武田信長(武田家 14代武田信重の弟・房総武田氏の祖)の子。穴山家に養子として入ったと言われるが詳細不明。

4. 穴山信介・四代(生年不明～1450年没)：

甲斐守護武田信重(14代)の子。甲斐守護武田信守(15代)の弟で穴山氏を継ぐ。信介の事績の史料はほとんどないが、この頃より穴山氏は、「下山」(現在の山梨県身延町)を根拠に、抵抗する南部氏に対抗すべく活動していたと思われる。

➡穴山家は、四代まで全て武田家からの養子で継承された。

5. 穴山乙若丸(生没年不詳)：

信介の嫡男であるが早世した。墓は現在の南部町中野の松岳院にある。

6. 穴山信懸(のぶとう)(生年不明～1513年没)：

穴山乙若丸の弟。息子穴山清五郎により暗殺される。この頃甲斐国内は内乱状況にあり、下剋上の風潮下、穴山一族内部では、武田派(信懸)と甲斐に侵攻して来た今川派(清五郎)に分裂していた。伊勢(北条)早雲と親密の関係にあったとも言われる。

7. 穴山信風(信綱?)(生年不詳～1531年没)：

信懸の三男。信懸死後家督を相続し、享禄四年(1531)死亡。信風の動向は、穴山氏の歴史の中で最も不明。永正14年(1517)甲斐国武田信虎が、駿河今川氏親の甲斐侵攻に勝利・和睦。甲斐国人衆が武田信虎に叛乱を興すも、天文元年(1532)武田信虎が、今井信元を破り、甲斐統一なる。

反武田派で国中西郡の有力国人衆大井氏も降伏し、大井氏の息女が、信虎の正室となり嫡男武田信玄が生まれる。

8. 穴山信友(1506生～1560没)：

信風が逝去後、穴山家の家督を相続したが、信友が信風の子であるという証拠はない。穴山氏初期の頃より、武田家より何代にわたり養子を迎えており、更には天文年間(1530～)の初め頃、武田信虎(18代)の娘「南松院」(武田信玄の姉)を正室とし、武田家との関係を強化し、武田氏御一門衆=御親類衆として活躍した。

武人としてばかりでなく、文人としても優れていた。正室南松院は、美人と言われ仏道への帰依厚く、京都・天竜寺の高僧より「葵庵理誠」の法号を授けられた。

穴山氏の河内領支配は、信虎の南部氏などの敵対勢力の一掃、甲斐国の統一などと共に発展してきた。金山経営と材木資源の活用が、財政の基盤としてきた。

この頃本拠地を、河内領の中心地「下山」に南部から移したと言われる。

信友・信君(梅雪)時代が、武田氏の後盾もあり「穴山家の最盛期」であると言える。

9. 穴山信君(梅雪 以下梅雪と表示)(天文10年1541～天正10年1582)：

信友の嫡子。幼名勝千代。永禄元年(1558)家督を相続。永禄3年(1560)武田信玄の次女「見性院」を正室に迎え、武田氏との結びつきを強めた。天正8年(1580)出家し「梅雪斎不白」と称した。天正10年3月(1582)武田勝頼と袂を分かち、織田・家康連合軍に降伏し、武田氏滅亡後織田信長から「河内領」の安堵を得た。同年6月

徳川家康と共に安土城にて織田信長に対面。その後家康と堺見物後、本能寺の変が起こり、梅雪は、京都宇治田原近辺で、野党(土民)の襲撃を受け落命。

注：武田家を支えた「武田二十四将」の一人。人柄＝風貌は怖く、文武に秀で風流を好む。独特の領国経営をし、家臣・領民の人望あった。  
信玄にも可愛がれた。

#### 10. 穴山信治(勝千代)(生年元亀3年1572～天正15年1588没 享年16歳)

梅雪横死後、家督相続し、元服し信治と名のる。1588年死亡により、穴山氏の正統は断絶。

#### 《まとめ》

- ◎穴山は七里岩台地にある要衝の地。穴山氏は、初代義武以前から存在した地元の豪族であつたと推定される。甲斐守護・信武(10代)は、息子義武を、甲斐源氏宗家逸見氏(甲斐国北西部を支配＝今の山梨県北杜市)の南(東)下を防ぐため、穴山家に養子として入れた。(佐藤八郎説・韮崎市誌)
- ◎通説では、義武に実子がないため、再び甲斐守護・信春(12代)は、弟満春を養子に入れ相続させた。
- ◎南北朝が統一した頃(1392頃)、南朝方であつた南部氏宗家が、陸奥国に配置転換となり、穴山氏が継いだ。満春、高野山で出家したが、室町幕府將軍義持に呼び戻され武田信元と名乗り、南部氏に奪われていた河内領(下山・南部)を奪回しようとした。

### 【穴山氏の滅亡－逆臣梅雪宇治田原越えならず、神君家康伊賀越えなる】

#### 《梅雪の前半》

- ・天文10年(1541) 穴山梅雪誕生、幼名勝千代。  
(家康1542～1616 信玄1521～1573 勝頼1546～1582)
- ・永禄元年(1558) 穴山信友隠居(死去1560)。梅雪家督相続。同3年穴山家統率この頃武田信玄次女見性院を正室に。(いとこ同志結婚)
- ・永禄4年(1561) 川中島の激戦(第4次)。梅雪、武田軍の左翼担当し奮戦。
- ・元亀3年(1572) 梅雪の嫡男穴山勝千代(信治)誕生。
- ・元亀4年(1573) 4月12日武田信玄信濃駒場で死す。→「甲府・信玄公まつり」  
(天正元年) 「甲陽軍艦」によれば、信玄の遺言は、《その死を3年間秘匿し領国を安定させ、遠征＝戦をしてはならず、もし敵が攻めてきたら領国内で戦うこと。武田勝頼は、信玄の孫武王丸信勝が、16歳で元服するまでの陣代(中継ぎ)であり、武田家の当主を示す旗印(風林火山の旗など)を使用してはならない》と。  
《更に、死す時枕頭に、武田氏一族の代表として武田信豊と穴山梅雪を呼び、勝頼の補佐を依頼した》と言う。  
➡武田家の嫡流は孫信勝であり、勝頼はあくまで諏訪家の当主である。  
➡信玄の遺言は、勝頼と梅雪との対立・離反の遠因となったと考える。

- ・天正元年(1573) 武田勝頼が家督相続し、信玄は病氣療養中と宣伝するが、信玄死すの噂は全国に広まり、徳川家康・織田信長陣営を元気づけ、反抗し始めた。家康は、駿河・遠江・三河で軍事行動を強めた。勝頼は、信玄の遺言を破り、武田軍を出陣させ、同2年遠州の要衝・高天神城を落とした。

➡この頃の勝頼は、まだ武田家当主としての地位は盤石ではなく、戦に勝つことによってのみ維持されていたと思われる。

- ・天正3年(1575) 5月三河国長篠(設楽ヶ原)の戦い。武田軍、織田・徳川連合軍に大敗。

➡勝頼は決戦をのぞみ、諸将(山県昌景・馬場信春ら)は反対、梅雪は強硬に反対した。戦で梅雪は、積極的に戦わず戦線離脱した。所謂「敵

前逃亡=軍規違反」をしたと言われる。

高坂正昌(春日虎綱・信玄以来の武将・四天王の一人・甲陽軍艦の原著者 著者小幡景憲)は、勝頼に梅雪切腹させるべきと進言したと言う。

武田家「御親類衆筆頭」の穴山氏・穴山衆を切る事ができなかったの

は、勝頼の温情か。家中分裂をおそれたか。

➡もともと勝頼と梅雪は折り合いが悪く、勝頼の温情は、逆に梅雪が勝頼を侮るようになったと言われる。

- ・天正3年(1575) 5月梅雪駿河国江尻城代に(勝頼が任命)。前任山県ら武田軍の有力武将が相次いで死亡、人材不足に。

➡人材が払底した事に加えて、家康と向き合い、駿河・遠江の支配を

固

めるには、梅雪が、御親類衆であり、本拠地が駿河国と地続きの河内領の経営、駿河国の状況を熟知、旧今川家臣団との結びつき、更には、その能力を買ったものとおもわれる。

- ・天正4年(1576) 4月信玄の葬儀。梅雪参列。

- ・天正5年(1577)～天正8年(1580) 天正4年より、駿河国をめぐる、武田・徳川間の争いを始まる、天正8年迄。

天正6年3月上杉謙信急死。御館の乱始まる。同8月上杉景勝と和睦(甲越同盟)。

天正7年 武田・北条の関係悪化(甲相同盟の決裂)。

天正8年 北条・織田の同盟なる。同4月信長、石山本願寺と和睦。

勝頼、重要な同盟国失う。

この年、信君(梅雪)、出家「梅雪斎不白」と称す。

➡この間、江尻城主として甲斐・武田家(勝頼)に忠義をつくすも、武

田領のなかで最も厳しい位置＝駿河・遠江にいた梅雪は、常に緊張感を保ち、時代の流れを把握していた一方、勝頼の考え・治世体制は、依然として旧体制で、武田家の行く末に、一番危機感を持っていたのではないか。

(5)

## 《梅雪の終焉》

- ・天正9年(1581)1月 梅雪の進言により、新府城築城開始。12月完成、移転。
  - ➡梅雪は、「織田・徳川・北条軍が攻めて来た場合、防ぎようがない。籠城策しかない」と進言。築城については、武田一族衆の中には反対する重臣も多く、勝頼と武田一族衆との対立は決定的になった。
  - ➡さらにこの頃、梅雪は、勝頼との関係強化の一環として、嫡男勝千代と、勝頼息女との婚姻を目論み、勝頼に申出るも、勝頼これを断り、武田典厩信豊の嫡子との婚姻を決めた。勝頼との関係は最悪となる。
    - 3月 高天神城、家康により落城、勝頼の権威失墜。
  - ➡この前後より、武田氏の退潮は明らかになり、駿河・遠江の支援者(国人衆)は、離反し始めた。
    - 6月～12月 織田信長は、甲斐・信濃の武田領攻撃の準備(兵糧備蓄)を始めた。
- ・天正10年(1582)1月25日 信濃・木曾義昌(正室は信玄の息女真理姫)の離反。
  - 2月2日 勝頼、人質であった義昌の母、嫡子、娘を処刑。
  - 2月3日 信長、金森長近軍は飛騨口、織田軍は伊那口、徳川軍は駿河口、北条氏政軍は関東口から侵攻する配置を決める。織田軍大将は、織田信忠。
  - 2月25日 梅雪、穴山衆5百人程を甲府に送り、人質とされていた妻(見性院)、嫡男勝千代らを連れ出し本拠地下山に帰還させた。→梅雪謀反。武田家中に動揺、逃亡兵続出。
  - 2月下旬～3月上旬家康との「降伏条件・梅雪寝返り交渉」成立。
    - 内容**：「信長が、甲斐を領国に編入した時、自らの知行地＝河内領の安堵と梅雪の地位を安堵することを、信長に斡旋する。又それが不可能の場合、家康が扶助する。穴山衆、特に梅雪の妻子については、人質として差し出すが、身分は保証する。」
    - 家康の口説き文句：「信長陣営に入る事は、武田家に対する裏切りではなく、名門武田家を守る最善の道」と説得したと言われている。
  - 武田家を裏切る理由**：一般論・戦国時代の家臣(団)は、居住地域を支配する在地領主。大名を主君として仰ぐのは、主君が自分の所領を外敵から守ってくれるからで、見返りに奉公(戦に参加・税金の負担)し、戦に勝てば、新所領を得ることが理由であった。主君にその技量がなけれ

ば、新しい主君を選ぶのが一般的である。状況・梅雪にとって、長篠敗戦後、駿河・遠江で、徳川家康と対峙するのは、最も厳しい立場に置かれていた。一方勝頼は、御館の乱後、

(6)

北条氏に、北・東から攻勢を受け、それに対応せざるを得なかった。結論・こうした状況下梅雪は、家康と内通し勝頼を見限る道を選択した。個人的関係・信玄の遺言。嫡子勝千代と勝頼息女との結婚不成立。統治軍事方針の考えの対立(勝頼側近衆の重用 有力武田一族との軋轢)。

➡武田家を存続させるには、織田・徳川氏との連携しかなく、それは勝頼には不可能。ならば武田一族であり、武田宗家と血の濃い穴山氏＝梅雪しかないと考えた。

- 2月末頃 勝頼、新府城に。兵士1万5千余から1千人余に。
- 3月2日 高遠城(勝頼の異母弟仁科盛信)、一日で陥落。
- 3月4日 梅雪、家康と駿府・蒲原城にて対面。
- 3月8日～10日 梅雪、秋山寅康の息女・於都摩(おつま)を養女として、家康に差し出す。家康は浜松に連れ帰り側室とした。翌年於都摩は、家康五男・万千代を生むが、万千代9歳の時死亡。その養育を梅雪未亡人見性院に委ねたと言う。
- 3月11日 勝頼、郡内領主小山田信茂の勧めで、3日新府城に火を放ち岩殿城(大月市)へ籠城の為進む。小山田氏の裏切りにより、最後は、織田軍(滝川一益)と激戦、田野にて勝頼37歳、嫡男信勝16歳、勝頼夫人(北条氏女)19歳、主従ごとごとく戦死(自害)。 →甲斐源氏武田氏滅亡。  
梅雪、甲府にて織田信忠と対面。勝頼の首級とも対面した。
- 3月20日 諏訪大社・法華寺にて、織田軍本体を率いた信長に出仕。金三百両とも、金子二千枚とも言われる金を献上。  
→信長との主従関係が成立。
- 3月29日 信長、戦後の甲斐の分割策を発表。甲斐国は河尻秀隆、河内領は穴山梅雪、江尻領は徳川家康。  
信長は、4月10日甲府をたち富士山をみて東海道を経て、安土城に帰る。
- 4月25日 梅雪、亡母南松院(信玄姉・穴山信友妻)の十七回忌法要で、「武田家再興」を宣言。
- 5月8日 梅雪、織田・徳川への帰属、本領安堵に対するお礼

の為、家康と共に、安土城に向け、浜松を出発。

5月15日安土城到着。信長の歓迎を受ける。19日能興行酒宴。

6月2日京都で、信長から茶会の提案あり、応ずる。

5月21日 梅雪、家康と共に京都・奈良・堺見物へ。

5月29日 梅雪・家康堺入り(信長側近長谷川秀一案内役)。

(7)

6月1日 信長、京都に入り、本能寺に泊まる。

6月2日払暁 「本能寺の変」明智光秀の謀反。

6月2日早朝 梅雪、家康堺を出発。河内国枚方で、知らせに  
来た京都の豪商・茶屋四郎次郎と会い、本能寺で光秀謀反、  
信長横死を知る。梅雪・家康は驚愕し、とりあえず京都・  
宇治田原を経て桑名に脱出を計るが、梅雪は、河内国飯盛  
山西麓で別行動を取り、宇治田原の草内(くさじ くさうち  
現京田辺市)で、一揆(落ち武者狩り)に襲われ落命。  
家康は、茶屋四郎次郎の金銀の支援、伊賀忍者等の支援を  
受け、無事桑名を経て、岡崎に帰還。

→世にいう「神君の伊賀越え」と言われる決死の逃避行。

→大河ドラマ「真田丸」梅雪=榎本孝明 家康=内野聖陽

**別行動の理由:**①家康との同行は、落ち武者に襲われる可能性  
ありと判断。回避した。②梅雪は、家康を疑った。殺害され  
るかも。③家康が、梅雪が邪魔になり暗殺を命じた。  
④梅雪が家康の身代わりになり、家康の逃避を助けた。⑤  
梅雪、「痔病」の為、家康から一里ほど遅れた。運悪い。  
→別行動の理由は明らかでない。今後研究したい。

## 【その後の穴山氏一族・穴山衆】

- ・天正10年(1582)6月 6月～10月 旧武田領をめぐり、上杉・北条・徳川方が相次いで侵攻し争乱が始まる(天正壬午の乱)。10月下旬徳川・北条氏和睦、同盟成立。(天正壬午の乱終結)
- ・天正11年(1583)3月 梅雪息女、家康重臣酒井忠次子息小五郎に嫁ぐ。
- 6月 家康五男万千代誕生。生母下山殿(於都摩の方 梅雪養女)。
- ・天正12年(1584)3月 小牧・長久手の戦い勃発。穴山衆参陣。
- ・天正15年(1588)6月 武田信治(勝千代・梅雪嫡男)死去。家康は、武田家断絶を惜しみ、五男万千代(信吉)に武田家を継がせる。但し時期不明。
- ・天正18年(1590)7月 小田原合戦・北条氏、秀吉に降伏。東北地方も制し、秀吉、天下統一。この時穴山衆は、駿河城下を警護。見性院(梅雪未亡人)も、家康の庇護のもと駿河城に居住か。
- 8月 家康、関東に移封。



- 武田万千代(信吉)下総小金城 3 万石に封じられ、万千代に従い、穴山衆、甲斐を離れる。
- ・ 文禄元年(1592) この年、武田万千代、下総佐倉城主に。
  - ・ 慶長 5 年(1600)9 月 関ヶ原の合戦。
  - ・ 慶長 7 年(1602)11 月 武田信吉、常陸国水戸 28 万石を。 穴山衆も水戸に移る。  
(8)
  - ・ 慶長 8 年(1603)9 月 武田信吉死去。享年 21 歳。これにより武田家除封。
  - ・ 慶長 14 年(1609) 家康十一男頼房、常陸水戸城主に。25 万石。御三家。  
これにより穴山衆は、普通の水戸藩士に降格。
  - ・ 元和 8 年(1622)5 月 見性院(武田信玄息女・梅雪妻)死亡。穴山氏断絶。

### 【見性院と保科正之(1611~1672)】

1. 見性院は、夫梅雪・嫡男勝千代(信治)死後も、家康より庇護を受ける。
2. 家康、江戸幕府開府後は、武蔵国(今のさいたま市)に知行地 600 石を拝領し、江戸城田安門内の比丘尼屋敷で余生を送っていた。
3. 2 代将軍秀忠の乳母は、秀忠近習の井上半九郎の母で、秀忠は何回もご機嫌伺いに乳母殿を訪ねていた。
4. 北条家家臣神尾伊予の娘お静(於志津)は、乳母殿の給仕役(下女)として仕えていた。ここで秀忠が、お静を見初めたと言われる。
5. 乳母殿に気に入られたお静は、使いとして、比丘尼屋敷に住む見性院を度々訪れ親しくなったと思われる。
6. やがて、お静は秀忠の子を懐妊し、慶長 16 年(1611)5 月、見性院・信松院(信玄六女 信長嫡男信忠と婚約するが解消 八王子在住)の支援を得て、保科正之誕生。
7. 老中土井正勝らを通じ、秀忠に知らせるも「覚えがある」との事にて正式に認知されず、江戸城入りはできなかつた。秀忠は、謹厳実直・側室持たず恐妻家。正室(継室)は、お江与(お江・おごう 浅井長政とお市の子 姉は茶々)で、年上・嫉妬心強い。その後、見性院が、養子として預かったとも言われる。
8. 元和 3 年(1617) 正之 7 歳。見性院は、武門の子として養育することを願出、認められたのか、或は秀忠の指示か不明であるが、高遠藩(2 万 5 千石)藩主保科正光の養子に。養育費として、5 千石加増されたと言う。  
保科家の先々代正俊は、武田氏の武将(槍弾正)。先代正直も武田氏の武将、高遠城で織田・徳川連合軍と戦う。江戸時代になっても、見性院と高遠藩・保科家との《主従のつながり》はあったと思われる。江戸城登城の折、表敬訪問。
9. 保科正之。3 代将軍家光の異母弟、4 代将軍家綱の“補佐役”。会津藩祖。
10. 見性院の墓は、現在さいたま市・清泰寺にあり、門には、葵の御紋がある。

### おわりに 「逆臣・裏切り者というレッテルの見直し」

「経緯」: ①武田家に対する親族意識(母は信玄姉・妻は信玄二女)は強く、信玄存命中は忠誠を尽くした。②すでに諏訪家を継承した勝頼が武田を継ぐと、梅雪(特に妻見

性院)は、「嫡子勝千代こそ正統な後継者」と反発し対立し始めた。③表面化は、長篠の戦いでの、梅雪の行動＝退却。高坂政昌は、梅雪の切腹を進言、勝頼は、家中の分裂を恐れ、温情を行う。決定的なのは、甲府からの妻子奪取。

「評価(私見)：①梅雪は、江尻城の城主を務め、西の徳川氏、東の北条氏と、領土問題等々の交渉を行い、信玄の「外務大臣的役割」を果たし、早くから徳川・織田氏の

(9)

考え→新時代の到来に注目していた。②武田家の古い封建的体質に違和感を持っていたのではないか。勝頼では駄目だと考えていたのではないか。③織田・徳川側に入ることにより、甲斐国を、武田家(穴山家)を守り、河内領を中心に再興を果たすべく勝頼を裏切ったのではないか。④穴山梅雪は「逆臣である」「裏切り者である」という評価は、再検討されても良いのではないか。

以 上

#### 《参考図書》

- ・「山梨県の歴史」山川出版社 2000年
- ・「武田信玄－伝説的英雄からの脱却－」中公新書 1997年
- ・「図説 武田信玄の世界」秋田書店 1988年
- ・「穴山武田氏・中世武士選書」平山優 戎光祥出版 2011年
- ・「英傑の日本史 風林火山編」井沢元彦 角川文庫 2010年
- ・「武田二十四将」英和出版社 2014年

#### 《参考論文・当会での発表分》

- ・「武田の家名を遺さんと苦闘した穴山伊豆守信君(梅雪)」  
竹村 紘 副会長 約 10 年前特別講演会で発表
- ・「清和源氏の真実」  
加藤 導男 会長 平成 29 年 12 月例会で発表